

すれ違いざまに肩がぶつかる。

「つと、おねーさん、落とし物」

「あつ……すみません、ありがとうございます」

ぶつかった拍子に鞆から何か落としてしまったらしい。差し出されたものを慌てて受け取る。

……あれ？ わたし、こんなハンカチ持っていただろうか。そう思って首を傾げた瞬間、がしりと手を掴まれてしまった。

「ねえ、おねーさんカワイイね♡ ぶつかったお詫びするから、ちよつとこっちおいでよ」

「あ……」

汗が吹き出す。繁華街とはいえ昼間だからと油断してしまった。

引っ張ってくる手に抵抗するように立ち尽くしたけれど、目の前の男の人は臆することなくわたしの顔を覗きこんでくる。

どうしよう、怖い、離して欲しい。そう思うのに声が出ない。

「ほら、俺がイトコ連れて行つてあげ……いつ、てえ!？」

目の前が真つ暗になりかけた時——ばしん、と。

高らかに皮膚を叩く音がして、掴まれていた手が解放された。

驚く間もなくそのまま後ろから押しのける勢いで割り込まれ、わたしからは男の人の姿が見えなくなる。

「あのね、このコは今からアタシとデートだから、アンタみたいなウスノロに構つてる暇はないの。邪魔しないで頂戴」

低い声で啖呵を切る金髪の麗人に、男の人はひいと声を上げ、すぐにどこかに逃げてしまったようだった。



ろこもこうさぎ

絢辻  
透

「瑞希ちゃん、ごめんね、ありがとう……!」

「いいのよ、アタシこそ遅れちゃってごめんなさいね。それにしても、いくら伊織ちゃんがカワイイからって、ああいう手口使うの……ホンツト卑怯だわ」

助けに来てくれた金髪の麗人、こと瑞希ちゃんと共に、まだ人の少ない繁華街の裏路地を歩く。

瑞希ちゃんは頬に手を当て、すらりと引き締まった上半身を軽く仰け反らせながらプリプリと怒っていた。すっかり安心したわたしは、瑞希ちゃんの金髪が太陽光できらめいていて綺麗だなあ、なんて呑気に考えている。

「えっと、手口？」

「そうよ、伊織ちゃん、あんなハンカチ持つてないでしょ。落とし物渡すフリして逃げられないようにすんのよ」

「そうだったんだ……何かわからないうちに受け取ろうとしちゃった」

「あの手この手よね、やんなっちゃう。やっぱり駅まで迎えに行ったらよかったわね」

ふう、とため息をついている姿を見上げる。

瑞希ちゃんは高校以来のわたしの友達で、今は所謂オカマバーのママをやっている人だ。

すつきりと整った顔立ちは薄めのメイクがよく似合う。綺麗に色の抜けた金髪を後ろで小さなお団子にまとめているけれど、サイドは刈り上げていて甘すぎない雰囲気だ。

大ぶりのフープピアスもよく似合っていて、顔だけ見るとどこかの歌劇団の女優さんのよう。ただ全体で見ると背がかなり高く、恐らく180cm超え——本人は「やあね、170cm台よ♡」と言っているけれど。

（カッコいいなあ。わたしも、瑞希ちゃんみたいになれたらいいのに）

背が高く綺麗で、どんな男の人の前でも堂々としていて。

わたしもそういう人になりたいのに、実際のところ、ああやって手を握られてしまうと——昔のことを思い出して、身体が固まってしまう。

「伊織ちゃん？　どうしたの、ほら、着いたわよ」

「あつ、うん！　ありがとう……つとと」

「ここ危ないわよね、アタシでも酔っ払うと転んじゃうもの。ほら、掴ま  
て」

ぼんやり考えていたらいつの間にか目的のバーについていた。ここが瑞  
希ちゃんのお店「Bar GOLD DIVA」だ。

地下なので少し急な階段があり、慎重に降りようとしていたら手を差し  
出された。

爪先がキラリと煌めいたのが見えて、思わず瞬きをする。

「あ……瑞希ちゃん、ネイル変えたんだ。かわいいね」

「あら！　さすが伊織ちゃん、そうなの最近変えたのよ♡ シンプルだ  
けど親指にホラ、おっきいビジュール入れてもらって……って話は、お店  
の中でしたほうがいいわね？」

回りだす口を慌てて止めた瑞希ちゃんが肩をすくめて微笑む。

焦げ茶色のマスクラで縁取られた長い睫毛を見つめていたら、もう一度目の前に手を伸ばされた。

「ほら、伊織ちゃん。お手をどうぞ？」

悪戯めいた、恭しい王子様みたいな仕草すらサマになる。

わたしは見惚れそうになる気持ちを抑え、綺麗なネイルの施された手を取って階段を下りた。

男の人は怖い。

骨ばって大きい手は苦手だ。

けれど唯一、瑞希ちゃんの手だけは、平気だ。

「——あれ、誰か居る……？」

「ごめんなさいね、アゲハが潰れてんのよ。いつものことなんだけどね」

バーへ入った途端、ぐうぐうと寝息が聞こえて驚く。

見回すと、テーブル席のソファにフリフリの衣装を着たアゲハちゃんが眠っていた。水色の長いウィッグで顔は隠れているけれど、寝相が悪くて胸元やら太ももやらがちらちらと覗いている。

「アゲハちゃん、大丈夫なの？」

「朝しじみ汁ガブ飲みさせたから大丈夫よ。このコいつも夕方になんないと起きないの」

ケロツとした調子で言われて驚く。

アゲハちゃんはこのお店のスタッフで、話が面白くて大人気の子だ。

バーにはちよくちよく来ていたので顔見知りだけれど、いつも終電前には帰るから、こんなふうになっているところは初めて見た。

とりあえず足元に落ちていたタオルケットを被せておいて、カウンター席に座る。

瑞希ちゃんがカウンターのの中からグラスを取り出し、ウーロン茶を出してくれたので、ありがたく受け取った。



「ごめんね、お店オープン前なのに」

「いいのよ、夕方から予定あるって言ってたものね。……それで、どうしたの？　こんな平日の昼間に珍しいじゃない」

カタリと氷の溶ける音がした。

わたしはグラスを握り締め、うつむき、しばらく黙り込んで——そして、涙で少し滲んだ視界のまま、瑞希ちゃんを見上げた。

「くくく……あ、あのねっ、わたし……か、会社、やめられたの……!!」  
「アラやっぱり!!　やったじゃない、おめでとくくく♡♡」  
「うわああん、やっただよおくく……っ」

昂った感情のまま両方の手を開いて伸ばしたら、ぎゅっと握ってぶんぶんと振ってもらえた。

やっただ。やっど、やめることができた。本当に大変だった。

鳴り止まない電話。無限に積み重なる雑務。一件メールを返しているうちに三件返さなければいけないメールが届く日々。極めつけに周りは皆——

「……男の人ばかりだったのよね、会社。つらかったわね」

「うん、克服できるかと思ったんだけど……」

思い出すだけで大きなため息が出てしまう。荒く機嫌の悪そうなトーンで指示されて、胃がきゅつと縮まったあの日。肩に手を置かれて数分間動けなくなったあの日。

——わたしは、男性恐怖症なのだ。

「無理に克服しようとしても逆効果よ。離れられてよかったじゃない」  
「そう、だよね……ありがとう。でもね……」

振っていた手の力がへなへたと抜ける。

やめられたことに関して、もちろん本当によかった。よかったけれど――

「次の仕事決まらなくて……家賃払えないから、地元、戻ろうかと思ってて」

「……地元に？」

残念ながら、次の就職先が見つかるアテがない。

元より経理志望で男性がいない職場なんて無理だったのだろう。転職エージェントなどにも登録してみたけれど、その条件だと探すのは難しいと言われた。職業案内所にも行ってみたが、紹介されたところの給与では今住んでいるマンションの家賃を払えそうになかった。

「今日は……それを瑞希ちゃんに伝えなきゃと思って連絡したの」

「そうだったのね……」

「うん、せっかく瑞希ちゃんと一緒に東京生活満喫だーって、思ってたのに……本当にごめんね」

瑞希ちゃんのいつもニコニコした表情が真剣なものへと変わる。

それもそのはずだ。わたしと瑞希ちゃんは同じタイミングで地元から東京に出てきたのだ。片方が夢破れて地元へ戻る——とはちよつと大袈裟だけれど、そんなことになったら思うところもあるだろう。

わたしは両手を膝に戻してうなだれた。

「伊織ちゃん、実家は戻りたくないって言ってなかった？」

「あ……うん。お母さん、実家で和則さんと一緒に住んで……」

和則さんとは、わたしのお母さんの再婚相手だ。

父を早くに亡くした母親がどこからか見つけてきた新しい恋人で、少し前に籍を入れた。和則さん自身は、決して悪い人ではないけれど……

（いま、花梨ちゃんも一緒に暮らしてるみたいなんだよね……）

花梨ちゃんは帰省で一度だけ会ったことがある、和則さんの連れ子だ。

艶やかなロングヘアーにブランド物のカチューシャがぴたりと合っている、まんまるの大きな目をした可憐な女の子だ。年はたしかわたしの少し下で、まだ大学生。

「いまは和則さんの娘さんも、一緒に暮らしてるみたいなんだけど……お

母さんには、仕事決まってるなら一度帰ってきてなさい、って言われちゃって」

「そうなのね……」

俯きながらぼそぼそと零す。

帰省のときを思い出すと、どうしても乗り気にはなれない。

花梨ちゃんには、わたしがご挨拶と思って用意したお菓子を「花梨、太っちゃうからこういうの食べないことにしてるの」と言われて突き返されてしまった思い出があるのだ。

今また帰ったとして、わたしが彼女に歓迎されるイメージは一切湧いてこない。

カラコロと音を立てて溶けていくグラスの中の氷を眺めていると、瑞希ちゃんが少し大きく息をついて、わたしの顔を覗き込んできた。

「伊織ちゃん、アタシね」

「うん？」

「ずっと考えてたことがあるのよ。けどアタシほら、まあ、生物学的には……」

…男だし？　言うの、遠慮してたのね」  
「……？　考えてたこと？」

珍しいほど齒切れの悪い瑞希ちゃんに首を傾ける。焦げ茶色の長い睫毛を数度瞬かせたあと、ドキリとするほど真摯な視線を向けられた。

「伊織ちゃん。アタシ今、新大久保のマンションにいるの」

「あ、うん、お店から歩いていける距離のそこ借りたんだよね」

「そうなのよ。そこが2LDKで……一人だと持て余しちゃってて、部屋がひとつ空いてるのね。もし、伊織ちゃんが嫌じゃなかったら——……ルームシェア、しない？　家賃とかは、次のお仕事決まってからで構わないから」  
「え……！」

思いもしない提案だった。

瑞希ちゃんは少し逡巡した様子だったけれど、すぐにわたしを説得するような勢いで顔を近付けてきた。

形の良い瞳にじっと見つめられて心音が高鳴る。

「実家に帰る前に、もう少しこっちで就職活動してみるのはどうかしら。うちに住むのも、とりあえずお試しで一週間からとかでも構わないわ。一通り生活に必要なものは揃ってるし、なんなら身一つでも」

「瑞希ちゃん……」

「……その、流石に家だとメイクとか落としちゃうし、ホラなんていうか、ありのままのアタシ」だからね？ 怖がらせちゃったとは思うんだけど……」

「瑞希ちゃん……！」

わたしは、次第に自信なさげに手遊びを始める瑞希ちゃんの手を、がしりと覆うように掴んだ。

びっくりした様子の瑞希ちゃんに思い切り顔を近づける。  
逸る気持ちを止められない。

「うれしいっ、わたし懂れてたの、友達とルームシェア……！」

「えっ、えっ——……ほ、ホント？ 嬉しいけど、伊織ちゃんはアタシで大

丈夫なの？」

「もちろん大丈夫だよ、ありがたすぎるよ、だって他でもない。瑞希ちゃんだもん……！」

東京で友達とルームシェアなんて、憧れ以外の何物でもない。

しかもその相手が誰よりも信頼している瑞希ちゃんなら尚更だ。

瑞希ちゃんに驚いたのか、ほんの少し息を詰まらせてから、掠れた声で「それならよかったわ」と言った。

「あ、ただ、実はもう引越しの準備進めちゃってて、今月には引き払う予定だから、急に転がり込む感じになっちゃうかも……」

「あら、なら明日からでもいいわよ？ お試しがてら、お泊まりセット持っていっていいな」

「ほ、ホントに！？ ありがとう、じゃあ、この後の予定済ませたら、すぐ支度するね……！」

それからわたしは、浮き足立ったまま、瑞希ちゃんとルームシェアについ



てのあれこれ話を話して。

次の予定の時間が過ぎてしまいそうになつたところで、ようやく店を出た。

（うわあ、一気にこれからが楽しみになつちやつた……！）

うれしくて自然と早足になる。

憂鬱な実家に戻らなくて済んで、しかも誰よりも信賴して憧れている瑞希ちゃんと一緒に暮らせるなんて。

わたしは明日からに思いを馳せながら、駅の改札へと急いだ。



「ねえママあ、あたし聞いちゃったんだけど」  
「あら。起きてたのアゲハ」

「途中からね。ママさあ、前にあたしが潰れてママんち泊まった時、服で埋まった部屋にあたしのことぶん投げたよねエ？」

「ぶん投げたわね」

「あれから空いたワケ？ ああの部屋」

「空いてるわけないでしょ。これから片付けんのよ。アンタ手伝う？」



広いリビングに、食器を洗う音が木霊する。

「……あの、瑞希ちゃん、やっぱりわたしも——」

「ダメ。伊織ちゃんはそこで休んでて」

ルームシェア——というより居候、三日目の夜。

食器を洗う瑞希ちゃんを手伝おうとソファから立とうとしたら、すぐに

気付かれて釘を刺されてしまったところだ。

家賃を払おうとしても頑として断られてしまうし、せめて家事でくらいの役に立ちたいのだが。

「今日はずっとうちの掃除してくれたでしょ？　これ以上頑張るの禁止よ」  
「そんなの頑張ってるうちに入らないよ……お掃除、する必要ないくらいキレイだったし。もつとほかにわたしができること、ない？　お買い物とか」

瑞希ちゃんのマンションは驚くほど広くて綺麗で、掃除はすぐに終わってしまった。

他に何か頼まれようものなら喜んで何もかもやるのに、瑞希ちゃんは「せっかくお仕事やめられたんだし、ちよつとはのんびりしたらいいじゃない」と言うばかりで何もさせてくれない。

アイランドキッチンに向こうにいる瑞希ちゃんをソファからじっと見ていると、仕方なさそうな笑いを含んだため息をつかれてしまった。

「全くもう、働き者なんだから。じゃ、そんな伊織ちゃんにひとつお願いし

ようかしら」

「！ うん、何？」

初めての頼まれごとだ。わくわくしながらソファから身を乗り出すと、洗い物を終えたらしい瑞希ちゃんが無かを持ってわたしの隣に座った。

瑞希ちゃんが持っていたのは、サテンのリボンで包まれた上品なデザイ  
ンの箱だ。

中を開くと、ほのかに甘い匂いが漂う。

ひとつひとつが小さなリボンで包装されたそれは、色とりどりのマカロ  
ンだった。

「伊織ちゃん、甘いもの好きでしょ？」

「えっ？ うん、好きだけど……」

「お客さんからの頂き物なんだけど……アタシあんまり得意じゃないのよ、  
こういうの。よかったら伊織ちゃんが食べてくれない？」

「えっ……いいけど、それが、お願い？」

「そうよ。ほら、アーン」

「……むぐ」

リボンを取ったマカロンを口元に運ばれ、抵抗できずに慌てて啜える。  
瑞希ちゃんと一緒に暮らすようになってから、ずっとこんな感じだ。

何か手伝おうとしても、するりと躲かれて——……甘やかされて、しまうのだ。

「美味しい？」

「んむ……おいひいけど……」

「なら良かった。……ふふ、こぼれちゃってる、伊織ちゃんってお口小さいわよね」

「あ、ありがと……」

少し伏せがちの瞳で見つめながら、口元をそっと拭われてじわりと頬が赤くなる。

メイクをしていないときの瑞希ちゃんは、いつもの華やかな雰囲気とは違う精悍な顔立ちで、なんだかドキドキしてしまった。

（次こそは、役に立ちたいな……瑞希ちゃんには、わたしがいてよかったって、思ってもらいたい）

もぐもぐと食べながら決意を新たにする。

帰省した時の実家ではずっと和則さんと花梨ちゃんがいて、わたしが入る余地などなかった。

できることなら、あんな思いはしたくない。

「——それでアゲハが椅子から転げ落ちちゃってね……って、あら。伊織ちゃん、眠くなつてきちゃったの？」

「ん……ごめんね、少しだけ……」

「今日はずっとあちこち掃除してくれてたものね。でもソファで寝ちゃダメよ、風邪引いちゃうわ」

「うう……」

マカロンを食べ終わり、しばらく瑞希ちゃんとたわいない話をしている

うちに、眠気が襲ってきた。

わたしは一度眠気が来てしまうとどうにもならないタイプで、こうなつてしまふともうダメなのだ。瑞希ちゃんの声に反応できないまま、ソファに凭れてうとうと船を漕いでいると、わずかに笑いを含んだ吐息が聞こえてきた。

「もう、しょうがないわねえ。——少々失礼します、お姫様？」

「んえ……わ、わあつ、なに……っ？」

悪戯に芝居がかかった声が聞こえたかと思えば、背中と膝裏へと腕を回され、ふわりと身体が宙に浮いた。

驚いて固まると、間近に迫った瑞希ちゃんに「ほら、腕回して」と促される。

おずおずと首へと腕を回すと、あつという間に自室へ連れられベッドへと降ろされてしまった。

「うう、重かったでしょ、ごめん……」

「何言ってんの、伊織ちゃんなんか羽より軽いわよ。アタシ、こう見えて力あるんだから」

自慢げに二の腕にコブを作ってみせる瑞希ちゃんにふふつと笑いが漏れる。

大人しくベッドの中に潜り込むと、ぽんぽんと柔らかく叩いて整えてくれた。

「生活が変わると疲れやすいだろうから、少し休んで。お風呂沸いた頃に起こしてあげる」

「うん……ありがとう、瑞希ちゃん」

屈んだ瑞希ちゃんが、髪を整えるように数度梳いて撫でてくれた。それだけで安心して、あっという間に眠くなってしまう。

瞼が閉じかけているわたしに瑞希ちゃんは「おやすみなさい」と優しく声をかけて出ていった。



（毎日楽しくて、幸せだなあ。ずっと、こんな日が続けばいいな……）

ほとんど眠りに落ちそうになりながら考える。

無事に就職先が見つかって、毎日瑞希ちゃんと一緒に家事をして笑いあえたら、どんなに幸せだろう。

（でもいつか、瑞希ちゃんには……彼氏、できちゃうだろうな……）

今までなぜかそういった類の話を聞いたことがないけれど、あんなに綺麗で格好良くて思いやり深い人に、恋人ができないわけがない。

そうなたら、きつとわたしはここに居られないだろう。

——考えた途端、つきんと胸の奥が傷む。

濁りはじめた思考を遮断するように、わたしは深く布団に潜った。



「ううつ、ただいまあ……、……あれ？ 靴……」

一週間後の平日。

いつも揃っている瑞希ちゃんのお仕事用の革靴が、今日は玄関にひっくり返っていた。

慌てて濡らさないように端によける。今のわたしはびしょ濡れだからだ。午前中に就職相談所に行って帰ってきたのだが、突然の雨に降られてしまった。

（あ、瑞希ちゃん、ソファで寝ちゃってる……）

カーテンを閉め切った暗い部屋で、瑞希ちゃんはソファに身を投げ出して眠っていた。

瑞希ちゃんはいつも朝帰りだけれど、流石にわたしが朝出かけるまで帰ってこなかったのは今日が初めてだ。

きつとお店がすごく盛り上がったのだろう。

タオルでざつと身体を拭いてからソファで寝ている瑞希ちゃんの顔を伺い見ると、まだ少し赤らんでいた。お酒には強いはずなのに、珍しい。

「瑞希ちゃん、ソファで寝ちゃだめだよー……？」

そつと肩に手を当てて揺さぶってみるけれど、全く起きる気配がない。

瑞希ちゃんは、辛うじてメイクは落としたみたいだ。何もしなくたって綺麗なお顔ですうすうと眠っていて、いつもセットされている髪の毛が無造作に目元にかかっている。

格好いいけれど、見惚れている場合ではない。

どうにか持ち上げられないかなと、こないだの瑞希ちゃんみたいに背中腕を潜り込ませ、ちよつと力を込めてみた——そのときだった。

「んん……」

「わつ、わ……！？」

瑞希ちゃんの腕が伸びてきて、低い唸り声と共に、ぎゅうつ、と。  
まるで抱き枕みたいに、胸の中へと抱き込まれてしまった。

驚いて全身が固まる。瑞希ちゃんは変わらない様子で穏やかな寝息を立てていた。

（えっ、ど、どうしようっ……いや、ていうか、わたしまだ濡れてるじゃん！  
このままじゃ瑞希ちゃんも濡れちゃう……っ）

慌ててもぞもぞと抜け出そうとするけれど、力強い腕はぴくりとも動かない。焦りと恥ずかしさに顔が熱くなつたとき、ほとんど事故みたいに瑞希ちゃんの唇がわたしの耳たぶを掠めた。

「ひゃんっ……うう、瑞希ちゃん、起きてよお……！」

「——ん、何……？」

くすぐすたくて変な声が出てしまって、恥ずかしさに悶えながらじたばたと身を振っていると、瑞希ちゃんが身を起こした。

やっと起きてくれた——そう思ったのに。

ぼんやりと薄目を開いた瑞希ちゃんが、真っ赤になっているわたしのことをじっと見て、首を傾げた。

「……何これ、夢？」

「へっ!？ ゆ、ゆめ？ なっなんで、くくひやつ……!」

「はあ、夢よね……何回こういう夢見たら気が済むのかしら、アタシって……」

いつもみたいな明るい声音じゃない、お酒の匂いが交じる気怠げな呟きに心臓が跳ねる。

振る身体を閉じ込めるように抱き直され、カリ……ッ♡ と耳へ甘く囁みつかれて、びくと腰が震えた。

「うあっ!？♡ や、やつ、何……!？」

「あら、いつもより可愛い声……もつと聞きたくなっちゃうわね」

悪戯するみたいにすりすり首筋を撫でられて擦ったさに身悶える。笑いの交じる言葉が聞こえて慌てて口を抑えると、まだどこかぼんやりとした様子の瑞希ちゃんがはたと瞬きをした。

確認するように胸の膨らみを、つつ、となぞられる。

「ひうつ……瑞希ちゃん、く、くすぐりたい……!」

「やだ、濡れててスケスケ……いくら夢だからって都合良すぎるわね、コレ」  
「くくっ!? ゆっ、ゆめじゃない、あうつ……!?!?♡」

わたしのことなど気にも留めないように呟きながら首筋に唇を埋められる。そのまま、すり……♡ と濡れたスカートの中へと手のひらを差し入れられてしまった。

乱暴ではないけれど無遠慮な手つきに、なぜか腰が疼く。

どうしてこんなことに。

もしかして、この暗い部屋の中、わたしを誰か別の人と間違えているのだろうか。

「うう……っ瑞希ちゃん、まって、違う、わたし……っんう！？♡」

「ふふ、ホントにかわいい声……スカートもびしょびしょじゃない、こんな  
の着てたら風邪引いちゃうわよ……？」

「……ちがつ、あつダメ、やめて、めくつちや、うあ……っ」

衣擦れの音が響いて、スカートをずり上げられてしまった。

恥ずかしさでいっぱいになりながらも、あれ？ と更なる疑問が沸く。誰  
かと間違えているにしろ、スカートと言っていたし、さすがにわたしが女性  
であることくらいは分かっているだろうに、どうして。

瑞希ちゃんは、男の人が好きなのでは――

「あら、パンツまで濡れちゃってるのね、すつごくエッチ……♡」

「へ……っあ、っあ！？♡ やだ、まって、そこ、っうあ……っ！？♡」

考えているうちにスリ……♡ と指先が下着越しの割れ目をなぞって、  
びくと身体が仰け反った。

気付いてくれるかと思ったのに、ちつともそんな様子はない。それどころ

か熱を持った吐息と一緒にスリ♡ スリ♡ とクリトリスのあたりを撫でられて変な声が出てしまった。

「ここ撫でるだけでビクビクしちゃうのね、はあ、たまんない……」

「えっ、えあつ、あ……っ！？♡ うう、瑞希ちゃん、ダメだつてばあ、あっ♡」

明らかに興奮した低い声音にぞくぞく……っ♡ と言ひ知れない快感が襲ってくる。

必死にずり上がって逃げようとするけれど、追い縋るように片手で抱え込まれて、またスリスリ♡ されてしまった。

（やだ、やだ、スリスリやめて……♡ そんなのされたら、き、きもちよくなってきたやうのに……うう♡ なんてやめてくれないの……っ？♡ わたし女の子で、瑞希ちゃんのか、彼氏？ じゃないのに……あ♡ やだあ、先っぽのここ、こねこねしないでよお……♡）



「ふあ♡ うう、くくな、なんで、つうあ♡ わつわたし、おとこじや、ない……♡」

「ええ？ なあにそれ、可愛すぎ。男じゃないの、そうなのね……でも、アナタにもほら……おちんぽ、ついてるわよ……？」

「え……えっ、あ？♡ あっ？♡ やっそこ、おち……っじやな、くくあうう……っ♡」

カリカリッ♡ こりこりこり♡

触られているうちに布地が食い込んで、形が露になってしまうそこを爪先で引っ掻かれて甘ったるい声が出てしまう。こんな状況なのに痺れるような快感が襲ってきて情けない。

涙目で見上げた瑞希ちゃんの顔は、首まで上氣してぼんやりとしながらも、まるで獲物を捉えた獣のような鋭さを秘めていた。

「このコリコリしてるって、おちんぽじゃないの？」

「っ！？♡ ちっちゃがうう、あっ！？♡ あっだめえ、んんくく……っ♡」  
「違うって言われても、ねえ……そんなに気持ちよさそうな顔してると、説

得力ないわねえ……」

くにくに♡ すりすり♡ ぬちゅ……っ♡

目を細めた瑞希ちゃんがくすくす笑って膨らんできたそこを捏ね回す。

滲んだ愛液が恥ずかしい音を立てて、恥ずかしいのに頭がぱちぱちするみたい甘い快感が止まらない。どうにかこらえようと身体を丸め、唇を噛む。

「ふう♡ ふうう……っ♡ んんっ、んうーっ……♡」

「こーら、唇噛まないで、皮剥けちゃうわ。……ちゃんと口開いて、可愛い声アタシに聞かせて？」

「や……っづう？♡ ふあ、あっ、やつ、やぐらあ……♡」

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ と布越しのクリトリスに愛液を擦り付ける手はそ

のままに、瑞希ちゃんはまだ片手を頬へと添えてきた。そのまま口を開くのを促すように親指を唇へと添わせられて、抵抗できずに開いてしまう。

さつきよりも鼻にかかった甘い声が出てしまつて、恥ずかしくてたまら

ない。

「ふあつ、ああっ♡ あう……♡ おー……♡」

「シー……♡ 可愛い声……それにしても感じやすいわね、ちよつと先っぽカリカリしたくらいでお目々もココも、とつろとろ……」

からかうような言葉にまた熱が上がる。アタシの願望だだ漏れって感じ、と呟かれたけど、気持ちよさで次第に腰が浮き上がってきてしまつて何を言われたのかよくわからない。

ぬるついた指先でこしこし♡ すりゆすりゆ♡ される度に腰がカクついて、閉じられない口から声が溢れてしまう。

「ふあ、あっ♡ み、みひゆき、ひゃん……♡ こ、こえつ、は……はひゆか、ひい、っうああ♡」

「ん……？ 舌っ足らずでかわいいわね……なあに、声がいや？」  
「ん、うっ、いやっ、いやあ……♡」

唇もクリトリスもすりすり♡ 撫でられながら聞かれて必死にこくこくと頷く。甘ったるく微笑む顔に理性がどんどんとろけていくみたいだった。顔を近付けられて、鼻先同士がくつつく。

「……じゃあ、塞いでる？」

「ふあ……？」

「唇嚙んだら危ないでしょう？ だからこの可愛いおちんぼシコシコされてる間、アタシの指でお口開いておくか、キスで塞ぐか、どっちかよ。ね、どっちがいいかしら……？」

誘うように頬へと唇を寄せながら囁かれて、ひくん♡ とまた腰が浮く。どっちかなんて、そんな言い方ずるいつて思うのに、口ごもっている間にパソツの中に手を入れられてしまつてそれどころじゃない。

よく手入れされた、けれど少し骨ばつた指で、ピンと勃起したクリトリスを直接きゅっ♡ と掴まれ、扱かれてしまった。

「っうあ、おーっ♡ あっやがあ、まつへ、っあああっ♡」

「ふふ、直接つまめるくらい大きくさせて、すっごい声出しちゃって……♡  
ねえ、どうする？ 声恥ずかしいんでしょう、アタシとキス、する……？」  
「ん♡ ん、する……っ♡♡ みひゆき、ひゃんとお……する、きす、きすっ、  
するう……っ♡」

「あーもう、本当可愛い……♡ いいわよ、キスで塞いでてあげる……」  
「ん、んう……んむっ、んんー……♡」

嬉しそうな声と共に被さるように唇を塞がれた。

ちゅ……♡♡ と柔らかく吸い付くのと一緒に、ぬるついた指でクリトリスをちゅこちゅ♡♡ 扱かれて、頭が真っ白になる。

（どうしよう、わたし、はじめてのキスなのに♡ 瑞希ちゃんに、こんなえっちなことされながらのキスになっちゃうなんて……うう♡♡ 舌すりすりされるの、きもちいいよお……♡♡ 頭ばーっとして、あ、ダメ、また愛液とぶとぶ溢れて……ダメ、腰、とまんない……っ♡♡♡）

「ん……腰ビクビク止まらなくなっちゃったわね、キス好き……？」

「んう♡ つふあ、わ、わからな、ツんう♡ つひう……つくう、んんん……♡♡」

とろろ♡ にゆちにゆち♡ こねこね♡ こねこねこね♡♡

溢れた愛液を掬われて先っぽにかけられて、また捏ねられる。キスで塞いでもらっているはずなのに喉奥から子犬みたいな声が出てしまつて結局恥ずかしいままだ。

どんどん酸素が足りなくなつて、ひくっ♡ ひくんっ♡ と大きく身体が跳ね始める。

「んんっ、つふあ、あ♡ み、みひゆき、ちゃ……わたひ、っなんか、くる、ああっ♡」

「んー……？ ふふ、身体ぶるぶるさせちやつてかわいい、もうイきそう……？」

「ん、んっ、いきそ、だから……はなし、あづっ！？♡ あっだめ、まつへ、まつ……んむうッ♡」

ちゅううつ♡ にゆちにゆち♡ ぬちぬちぬち……っ♡♡  
深いキスと一緒に愛液で濡れきったそこを扱くように上下されて、一気に足先へぴいんっ♡ と力がこもる。絶え間なく送られる快感に逃げ場がない。

「いいわよ、アタシとキスしながらイクところ、見せて♡」  
「っひい！？♡ あつまつて、それ……だめ、あああ……っ！？♡♡」

むにびっ♡ とおまんこのお肉を引っ張られて皮を被っていたクリトリス全体が露出してしまった。震えながら腰を引くけれどその分だけ詰められて、そのまま——ちゅこちゅこちゅこっ♡ と追いつけるように根本から先端までを扱かれる。

あまりの快感に背筋が反って唇が離れてしまった。

「あああっ！？♡ まっ、まって、らめ、ああいく、イっちゃっ、くくくっんあああ……っ♡♡」

びくっ♡　びくびくっ♡　びくんっ♡

何も考えられずに大きく口を開いて、はしたない声を上げながら何度も身体を波打たせ、わたしはイってしまった……♡

自分でするときとは比べものにならない快感に頭がバカになったみたいだ。

はふはふと息をついていたら、どこか拗ねたような瑞希ちゃんに顔を覗き込まれた。

「ねーえ、アタシ、キスしたままイクとこ見せてって言ったわよね？　どうしてお口、離しちゃったの……？」

「ふえっ！？♡　ち、ちが、それは……かつてに、ひうつ！？♡　まって、今ダメえ……っんんんっ♡」

くりゅ♡　くりゅ♡　くにくにくに♡

角度を変えた深い口付けと共にいったばかりのクリトリスを柔く撫でられて、引いたはずの気持ちよさがまた戻ってくる。



（まって、ダメ♡ 今ダメツ♡ イクときお口離しちゃったのは、わたしが、悪かったけど……っ♡ イったばかりのクリやさしくこねこねされると♡ また気持ちよくて、腰かくかくするの、止まらなくなっちゃうからあ……♡）

「ちよつと皮剥いたただけであんな感じ方しちゃうの？ やだもう、アタシの願望丸出しね……」

「っふえ？♡ な、なに、あっ♡ まっ……ゆび、とめて、ええっ♡」

「自分から腰押し付けてきてるくせに？ ちっちゃなおちんぼはもう一回してして♡ って、先っぽびくびくさせてるわよ……？」

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ にちにちにち……っ♡

休む間もなく根本から抜かれて目の前が瞬く。縋るものが欲しくて腕を回したら、愛おしげな視線と一緒に支えるように抱きしめられた。いじわるなのに甘くてずるい。

「うう♡ ううおっ、おちんぼ、じゃ、にやい……っふあお♡♡」

「おちんぼじゃないの？ じゃあ何かしら、この、アタシの指の中でビンツ

ピンに勃起してる、ココ……♡」  
「~~~~っう……、……♡♡」

わざとらしく、ここだよって言うみたいにつんつん♡　ってつつかれて  
恥ずかしさにすると鼻が鳴った。熱っぽく興奮した視線が言い淀むわたし  
の顔を捉えている。

カクカク……♡　と小刻みに揺れる腰を止められないまま、震える口を  
開く。

「~~~~っ……そこ、は……お、おちんぼじゃ、なくて……く……くり、くり  
とりす、だもん……っ♡」

「ふふっ、可愛い……そうなの？　ここ、クリトリスっていうの？」

「そっ、——……あっ♡　あっため、らめ、しごいちや、うああっ♡」

「でもほら、扱く度ムクムク勃起して勝手に皮も剥けてきて、おちんぼそっ  
くり……♡」

頑張って恥ずかしいことを言ったのに、笑いながら返されてきゅつと喉

が締まる。そのままにゆこにゆこにゆこっ♡ と扱かれてまた身体が仰け反ってしまった。

（ちがう♡ ちがうのに♡ わたし、女の子だもん♡ おちんぼなんてついてないっ♡ そっくりじゃない、のに……うう♡ 笑いながら耳元で、ひそひそ恥ずかしいこと囁かれると、ゾクゾク止まなくなっちゃうの、どうしてなの……っ♡）

「ふーっ♡ ふうづ♡ ちが、ちがうのに、っあうづ♡」

「違うの？ そうなの……じゃあ、アナタのここは、クリちゃんぽ、かしら……？♡」

ぬち♡ ぬち♡ ちゅこちゅこちゅこ♡♡

恥ずかしい言葉と一緒に愛液を塗りつけられて、皮ごと一緒に扱かれて目の前に火花が散る。あれほど身体を震わせていったはずなのにまた絶頂感が戻ってくるのを感じて喉がひくんと震えた。

「くちが、っあ♡ ちんぽ、じゃな、いっ♡ くり、くりとり、ひゅ、うあぶっ♡」

「ああもう、無自覚にエロいこと言ってんのたまない……♡ でもダメ、アナタのここはシコシコ抜かれてイっちゃうクリちんぽでしょ？ ほら、もう内ももぶるぶるしてるじゃない」

「っ♡ うう♡ だって、そんな、されたらあ♡ またきちやう、うううー……♡」

本当におちんぽにするみたいになににゅこにゅこにゅこ♡ と抜かれてぞわぞわと下半身が戦慄く。

霞む頭の中、わたしは瑞希ちゃんを見上げて回した腕の力を込めた。

「みずき、ちや……もお、だめ、わたひ……つだめだから、——きす♡ きす、してえ……♡♡」

「ン……♡ 覚えてたのね、可愛い、イイコ……じゃあ次はちゃんと、キスしながらクリちんぽイキ、しましうね……？」

低くて掠れた、けれど甘ったるい声に頭の奥がじゅわあ……♡と蕩ける。こくこくと頷くと、表情を緩ませた瑞希ちゃんがまた深いキスをくれた。

（うう♡ キスキもちいい♡ キス好き♡ ゆるゆる唇同士擦られて、舌でゆつくり割り開かれて、にゆるにゆる絡めながらクリ触られると♡ きもちよすぎて、すぐ頭真っ白になる♡ あ、やだ、吸わないで♡ ちゅうくって吸われながら扱かれると腰ういて、あ、ダメ、イク……っ♡♡）

「くくくっ♡ つふあ、ン、イク♡ みひゆきひや、いくう、んっ……っ……」

びくっ♡ びくん♡ かくっ♡ かくかく……♡

浮いた腰が何度もうねる。わたしはほとんど自分からクリトリスを押し付けるみたいにして、またイってしまった……♡

大きな波が超えたあとも、はしたないほど腰が揺れてしまう。頭がボーっとしてきて止めることができない。

「上手にキスしながらイけたわね……♡ イイコね、ほんと、可愛いわ……」  
「ふう♡ ふう……♡ んん……っ、う……♡♡」

ちゅ、ちゅ、と褒めるみたいに甘く鼻先や頬へと口付けられて目元が蕩ける。意識すら遠のきそうな余韻の中、まだ唇同士を合わせていたくてむずがると、笑いながらまたキスをくれた。

ちゅ……♡ と、場違いなほど清廉な、柔らかいキスにうっとり目を閉じる。

（……♡ キス、きもちいい……っあ？ なんか急に、体重かけられて……あれ？ 瑞希ちゃんの……おっ、おちんぼ……固くて、大きくなってる？ これって……わ、わたしで、興奮してくれたってこと、なのかな……？♡）

体重をかけられた拍子に、太ももへごりゅっ♡ と主張する感覚があった。じんわりと頭が痺れる。

唇を離されて、少し身を起こした瑞希ちゃんが熱を帯びたぼんやりとした表情をしていて、どうしよう、このままもつとエッチなことされちゃった

ら——って、ほんのちよつとだけ期待したとき。

ドスンと、瑞希ちゃんの頭がわたしの胸に落っこちた。

「うぐう……っ!？」

「……………」

「えっ……え……っ?」

突然の衝撃に全身が固まる。

びっくりして我に返りながら、胸に落ちた姿を見ると——

瑞希ちゃんは頬を染めたまま瞼を閉じて、スー……スー……と、安らかな  
寝息を立てていた。



あれからわたしは、瑞希ちゃんの顔を直視できていない。

「あらおはよ、伊織ちゃん。今日ももう出かけちゃうの？」  
「おつ、おはよ、そうなの、急に面接入っちゃって……！」

朝、洗面台にやって来た瑞希ちゃんから逃げるようにそそくさと部屋に戻る。

ドアを閉めて大きく息をついた。

（びっくりした、朝からドキドキしちゃうところだった……）

瑞希ちゃんは、あの時のことを全く覚えていなかった。

わたしはあのあと、眠る瑞希ちゃんの下からどうにか這い出ることに成功し、お風呂に入った。そうしてドキドキしながら瑞希ちゃんが起きるのを待っていたのだが——……

夕方に差し掛かる頃、突然ガバリと起きた瑞希ちゃんは、開口一番「嘘、アタシなんで家にいるの!？」 お客さんと昭和歌謡メドレー大熱唱してたはずなんだけど……!？」と叫んだのだ。



（ほんとのこと、言えなくて……嘘ついちゃったから、気まずいし……）

慌てる瑞希ちゃんに思わず「わたしが帰ってからはずっとソファで寝てたよ」と言ってしまった、それからずっとまともに顔を見れずにいる。

——面接というのも、嘘だ。

行きもしない面接用のリクルートスカートを履きながら、わたしは小さくため息をついた。

改めて、考えてみると。

新宿二丁目では、ああいう事故的な触れ合いは「よくあること」なのかもしれない。

もつとわたしが軽やかに「瑞希ちゃん、わたしのこと襲おうとしたんだよ、お酒には気をつけてよね」なんて言えれば、それで済んだ話なのかもしれないが——。

（ドキドキしちゃって、絶対無理だよお……）

あの日からずっと意識してしまつて、とてもじゃないけれど軽やかには言えない。

瑞希ちゃんの顔を見ないようにしつつ、必死に平静を装つて接しているけれど、そんな中でもやはり色々な疑問や思いが押し寄せてきてしまった。

——瑞希ちゃん、女の子もいけるのかな、とか。

ああいうエッチな夢、よく見てたのかな、とか。

いつもと違って、意地悪だったな——とか。

そういうことを考えるたび、あの時のことを思い出してぶわりと全身が熱くなる。

わたしは慌てて首を振り、支度の続きに取り掛かった。

「伊織ちゃん、帰るのはいつ頃なの？」

「あつ、えつと……瑞希ちゃんが出勤する頃になつちやうかも、ごめんね」  
「謝ることないけれど、連日じゃない。そんなに根詰めなくてもいいんじゃないかしら。……ああ、ほら」

玄関で靴を履いたところで声をかけられた。  
メイクを落とした瑞希ちゃんはどこか物憂げな表情だ。近寄って少し屈  
まれて思わず身体が固まる。

「前髪乱れてるわ。……ちよつと触るわね」  
「あ……っ」

長い指が優しく髪に通される。  
跳ねた前髪を整えられているうちに、この間その指で何をされたのか思  
い出してしまつて、カツと全身の熱が上がった。

「……あ、ありがとう……っ！ 帰ったら休むから大丈夫だよ、じゃあ、  
行ってくるね……！」

「ええ……いつてらっしやい、伊織ちゃん」

慌てて距離を取つて身を翻し、早足で玄関から出た。

マンションから出て、ビルのたくさん見える曇り空を見上げながら深呼吸をする。

（駄目だあ、ドキドキするの止められない……怖いわけじゃ、ないのに）

あの手を意識する度、うまく会話ができなくなってしまう。

男性や男性の手が苦手なわたしだけど、今まで瑞希ちゃんの手に対してだけは、こんなふうになることはなかった。

瑞希ちゃんの手はそれくらい特別だ。  
きっかけは——高校生の時まで遡る。



ある日学校の帰り道で、突然後ろから名前を呼ばれた。

「あ、いたいた。花房さーん」

「へ……わたし、ですか？」

振り向くとブレザーを着崩した背の高い人が立っていた。

ちよつと粗暴だけど顔が整っていて一部の女子には人気の、うちの学校の先輩だった。

「ねえ、一緒に帰らない？」

「え、ど、どうしてですか……？」

「オレ、実は前から花房さんのこと気になってたんだよね。可愛いなーって」  
貼り付けたような笑顔を向けられたのを思い出すと、首の後ろがぞわぞわとする。

あとから聞いた話だが、良くない人達とばかりつるんでいる、黒い噂の絶えない先輩だったそうだ。

どうしてそんな人に目をつけられたのかは未だにわからない。けれどたぶん、わたしが文化部で校則も破らないような、大人しい見た目だったから

——とか、それくらいのことだったんだと思う。

ただあの時のわたしはまだ何も知らず、可愛いと言われて不覚にも嬉しさを感じてしまっていた。

「ちよつと寄り道してこうぜ。オレいいところ知ってんだよね」

「いいところ、ですか……?」

「まあまあ。伊織ちゃんもさ、気に入ってくれると思うから」

気付けば名前を呼ばれていて、流されるままついていった先は、裏路地の古びたカラオケ屋だった。

耳の遠いおじいさんが営業しているらしく、先輩と同じような人たちのたまり場になっているらしい。

わたしはその時は、少し恐怖を覚えつつ、行ったことのなかった世界に連れて行かれたようであつたとわくわくしてしまっていた。

——本当に、すぐに帰ればよかったのに。

「お、可愛いの連れてきたじゃん」

「大人しそー、いいね、オレこういうの好み」

連れて行かれたカラオケルームには複数の男の人がわたしを待ち構えていた。

あの目を思い出すとぞっとする。わたしを見定めるような——まるでモノとしか見ていないような、そういう視線だった。

「な、何……何ですか、誰ですか、この人たち……っ」

「大丈夫大丈夫、怖いことしねえって。な？ こっちおいでよ」  
「イイコト教えてやるから」

後ずさったのに先輩に背中を押されて、よろけるように無理やり部屋の中に入らされて。

遠慮のない骨ばった手に、ぐっと手首を掴まれて引っ張られた瞬間——自分でも思っていないほどの声が出た。

「……や、やだ……っ！！」

「は？ おいコラ、でけえ声出すな」

「早くドア閉めろ。お前そいつ抑えとけ」

途端に荒くなる声音に恐怖で身体が固まった。

掴まれた手首に力をかけられてバランスが崩れる。無理やり椅子に押し倒されて、ボタンとドアが閉まる音がした。

震えながら見上げた視界には、たくさんの目が、にやにやと下劣な笑いを浮かべていて。

頭の中が塗りつぶされたみたいに真っ黒になった、その時だった。

「——アンタら、何してんだよ！？」

もう一度扉が開く音と共に、男たちの隙間から一筋、金色の光が見えた。

ドアの向こうに見えたのは、見慣れない学ランを着た明るい金髪の高校生だった。押し倒されているわたしを見て驚愕の表情を浮かべている。

わたしはほとんど声にならない声で「たすけて」と呟いて——



そうしてわたしを掴む手を振りほどいてくれた人こそが、他でもない瑞希ちゃんだった。



新大久保から新宿までの薄汚れたアスファルトを歩きながら、あの時のことに思いを馳せる。

あのときの瑞希ちゃんはまだ「橘くん」だった。喋り方も今と違って普通の、精悍な顔立ちで学ランのよく似合う男子高校生、という出で立ちの。といっても中身は今のまま、わたしを氣遣ってあれから毎日、隣の高校からうちの高校まで来て、一緒に帰ってくれていた。

（「瑞希ちゃん」になったのは、いつからだっただけ……）

いつだったかは覚えてないけれど、高校生の時だったのは確かだ。

毎日一緒に帰るうちに、次第に「橘くん」は伸びた金髪をお団子にしてまとめるようになり、だんだんと口調が柔らかくなつていつて——もしかして、と思つていたある日。

「伊織ちゃんには、本当のアタシのまままで話そうと思うの」と、言われたのだった。

（その日からずっと、瑞希ちゃんは、瑞希ちゃんだつたな……）

あの時は少しホツとした。

高校生の時は特に男性不信が抜けず、男性的なものが怖くなつてしまつていた。だから瑞希ちゃんのカミングアウトを聞いて、心から安心できる人ができたような心地だった。

そこからずっと瑞希ちゃんは、わたしの唯一無二の、大事な恩のある親友だ。

（なのになわたし、瑞希ちゃんのこと——）

大通りに出る一步手前で足が止まる。

今更自分の気持ちを認識してしまつて目眩がした。

そもそもあんな風に触れられて、恐怖で身体が固まらなかつた時点で決まつてゐるようなものだった。

（好きになつちやつたかも——しれない……）

足が動かない。

こんな気持ちを抱えて行くあてもなく避けるように家を出て、どこに行こうというのだろう。

大通りを早足で歩いていく人々は皆どこか自信ありげに見える。情けなく立ち止まったわたしだけが流れに乗ることができず、絶えない雑踏の音はここにゐるべきではないと囁いてるようだった。

これからどうしよう——そう思った時、スマホの着信音が響いた。

「あつ……？ お母さんだ」

母親からの着信だった。かかってくるのは一ヶ月ぶりだろうか。

仕事をやめて実家に帰ってきなさいと言われたとき以来だ。その後はメッセーシアプリでやつぱりまだ東京にいる、と伝えたはずなのだが。

「もしもし、お母さん？」

「伊織？ 久しぶり、あのね、伊織宛の書類がいくつか実家に届いててさ。保険会社からとかも来てるんだけど、あんた借りてたマンションどうしたの？ まだ東京いるんじゃないかったの」

「あ、そっか、住所実家に変更したんだった……今は、その……ルームシェアしてて」

「ルームシェアあ？」

素っ頓狂な大声に思わずスマホを耳から遠ざける。

色々聞かれそうだから話したくなかったんだよなあ……なんて思いつつ、こうなってしまうては仕方ない。複雑な心境ではあるが、現状を説明した。

「はあー、そうなの……なんだ、彼氏でも出来たかと思ったのに」

「とっ、友達だよ……！」

「まあそうよね、あんたに彼氏が出来る訳ないか」

「……」

突然頭の横の方を硬いもので殴られたみたいな感覚に陥る。

ため息と共に呟かれた言葉は、恐らくは「男性恐怖症の伊織には」という意味なのだろうけれど——……今のわたしには真っ直ぐ受け止めるのが難しい言葉だった。

「とにかくそのお友達にご迷惑かからないようにしなさいよ。それでまだ仕事決まってるなら一度帰ってきなさい、日帰りで帰れる距離なんだし、書類もなんか期限あるみたいよ」

「うん……わかった」

「……和則さんも花梨ちゃんも、伊織に会いたがってるから。ね」

「——うん……」

絶対嘘だ、と思いつつ通話を切った。

憂鬱に肩が落ちる。あんたに彼氏が出来るわけない、という母親の言葉が深く背中に刺さっていた。

瑞希ちゃんは、きつとわたしと付き合う気なんかないはずだ。恋愛対象として意識していたら「友達」としてルームシェアに誘うはずがない。

（このままわたしが、瑞希ちゃんと一緒に暮らしても……迷惑にしか、ならない……）

この間はきつと、わたしをお店のお客さんか何かだと勘違いしたのだから。

瑞希ちゃんはあるなに格好良くて気遣い上手なのだから、女のお客さんにだってモテないわけがない。それで今までああやって、身体だけの関係を持つみたいなの、そういうこともあったのだから。

面倒なトラウマ持ちのわたしには、話していなかっただけで。

「はあ……」

身体だけ、なんて。

わたしには無理だ。ただでさえ瑞希ちゃんとの生活は居心地が良すぎるくらいだというのに、このまま一緒にいたらもっと好きになってしまう。

これ以上迷惑がかかる前に離れなければ。どうせいまだに内定は出ていないのだし。

「はああ……」

もう一度大きく息を吐き出しながら天を仰いだところで、視界に突然ぬつと大きな影が現れた。

「ため息二連発の伊織ちゃんはつけ〜ん」

「えっ！？ あ、あつ……！！？」

お店で見る水色の髪とは違う、見慣れない姿に驚いて目が丸くなる。目の前の影はそんなわたしを見て、ししし、と特徴的な笑いを浮かべた。



side：瑞希

おかしい。

確実にあの日から伊織ちゃんに避けられている。

「アタシ、何かしちやったのかしら……」

先ほど玄関先で見送ったときも、まるで逃げるような早さで出かけて  
いつてしまった。

ため息をつきながらメイクを落とし、化粧水をペチペチと頬に叩く。この  
まま寝ようと思ったけれど、伊織ちゃんのこと気がかりで寝付けそうに  
ない。



（吐いたり、暴れたりした感じはなかったと思うんだけど……ああもう、全然思い出せない……）

正直なところ、今までも度々記憶を飛ばすことはあった。

とはいえ起きたらホテルで行きずりの相手と一夜過ごしていたなんてことはない。バーで誘われることはあったようだけれど、いつもラストまでいるアゲハに「ママいつも張り倒す勢いで断ってるよ」と言われている。なのでそういう類の心配はない——と思うのだが。

（なんかアタシ……男っぽいトコ、見せちゃったかしら。口調が昔に戻ったとか……？）

部屋に飾っている、高校時代の写真を見ながら考えを巡らせる。

伊織ちゃんの男性恐怖症は、恐らく本人が思う以上に根深いものだ。バーの店子たちはほぼ女性として認識しているらしく問題なく話せるけれど、男性のお客さんが隣に座ると未だに怯えるように視線をうろつかせ、近付かれたら少し身を引く。

（そんな状態で十年間、あれこれ手を尽くして……ようやくルームシェアまでこぎつけたっていうのに……）

この口調も格好も、全てはあの子の近くにいるためだった。

男らしい言葉や仕草を怖がるあの子に合わせて、柔らかい口調で話すうちに、いっそ振り切ってしまったほうがいいんじゃないかと思つて始めたことだ。

どうにかして、一番そばで守つていたいと——十年前から、そう思つていたから。

（一緒に暮らせば、守つていられるはずじゃなかったの……）

ヒビの入ったあの子の心を、他の誰にも壊されないように、大切に守つていたかった。

だというのに、他でもない俺が——あの子を傷つけるようなことを、してしまったのだろうか。

（~~~~ああもうダメ、このままじゃ絶対眠れない！）

パン！ と頬に保湿クリームを叩きつけて大きな息を漏らす。

この先どう振る舞うか、少し考える時間が欲しい。伊織ちゃんが来る前、アゲハと一緒に大急ぎで詰め込んだクローゼットからいくつか服を引っ張り出して着替える。

落ち着ける場所に行こう。歌舞伎町なら24時間営業のカフェがあるはずだ。

そう思って家を出て、新宿までの道を歩いていた時だった。

「え……っ？」

思わず声が出て慌てて電柱の影に隠れる。

大通りの一歩手前に、リクルートスーツを着た伊織ちゃんの姿があった。家を出てからそれなりに時間が経っているのに、どうしてまだこの辺りにいるのだろうか。

とうか——

（伊織ちゃん——なんで、男と一緒にいんの……！？）

伊織ちゃんの隣にはやや猫背気味の男が並んでいた。

体格はしっかりとしていて、伊織ちゃんより頭ひとつ背が高い。焦げ茶色の短髪は襟足が刈り上げられていて、アメコミの「シャツを着ている。

（何アイツ、誰！？　伊織ちゃんが一番怖がりそうなタイプじゃない……！）

伊織ちゃんはその男に向かって、親しげな様子で会話をしていた。

思わず聞き耳を立てる。けれど二人は駅に向かって歩いていようだし、距離があつてよく聞こえない。

そろそろとバレないように後をつけながら大通りまで出たとき、ようやく喧騒の合間に伊織ちゃんの声がわずかに聞き取れた。

「——あのね、わたし……ルームシェア、解消しようと思つてて……」

足が止まる。

冷水をかけられたような心地だった。

頭の中が混線して雑踏の音すら掻き消え、それ以上の会話は聞き取れない。

それからしばらくの間、まるで自分ひとりだけ時間が止まったように、遠ざかる二人の姿をぼんやりと見つめることしかできなかった。



「おかえりなさい、伊織ちゃん」

「た、ただいま、瑞希ちゃん……あれ、お仕事は……？」

夕方ごろ家に帰ると、瑞希ちゃんはソファで足を組んでいた。いつもならもう仕事に行っている時間のはずだが、違ったらしい。驚いて

いるとにこりと笑みを向けられる。

「今日非番のコが勘違いして出勤してきちゃってね。明日は休みみたいって言うから代わったの」

「そ、そうだったんだ……じゃあ、今日はゆつくりできるんだね……？」  
「そうね。ねえ伊織ちゃん、ちよつといいかしら」

ソファから立ち上がる瑞希ちゃんは優しい口調なのに、なぜだか温度がないように感じる。

わたしは壁へと一歩引いて視線を落とした。まだ気持ちの整理がつかない今の状態で、瑞希ちゃんと上手に話せる気がしない。

「あ、えつと……ちよつとこの後も、履歴書書かないといけなくて」  
「——へえ？」

あれ？ どうしよう、なんか、怒らせた？

氷点下にも感じる声音にごくりと唾を飲み込んでいると、近付いた瑞希

ちゃんに手を取られた。  
伏せた瞳と共にすん、と鼻を鳴らされる。

「ご、ごめん——えっと、履歴書書き終わったら、お手伝いとかは……っ」  
「……ふうん、ドルガバのライトブルーね。伊織ちゃん、この匂いは平気なんだ？」  
「へ……なに……？」

何を言われたかよく分からない。目を瞬かせて瑞希ちゃんを見上げると小さいため息をつかれた。

「いいえ？　ただ伊織ちゃん、アタシとお家でのんびりする時間はなくて男と会う時間はあるんだなあって」

「えっ、お……男？　そ、そんなのしてない、つきや……！？」  
「してない？　伊織ちゃん、今日はずいぶん嘘つきなのね」

責めるような口調と共に突然、腰に腕を回されて抱き上げられてしまっ

た。

混乱が止まらない。確かに嘘はついたかもしれないし、人と会いはしたけれど——どうして、バレているのだろう。

「まっまって、瑞希ちゃん、おろしてえ……っ」

「嫌よ。伊織ちゃん、ホントは面接なんて行っていないでしょう」  
「……っ」

言葉に詰まる。面接に行っていないのは確かだから、何も言うことができない。

どう言おうか悩んでいるうちに、瑞希ちゃんの部屋まで連れていかれてしまった。

足でバタリと扉を閉じられる。

「最近ずっと変だったのは、ほかに一緒に暮らしたい男ができたからだっ  
たのね」

「！？　な、なんで、そんなこと、きや……っ！」



「アタシはずっと怖がらせると思ってたのに。ねえ、伊織ちゃん」

どきりとベッドに押し倒された。

恐怖——ではなく、驚きで声が出ない。わたしを組み敷く瑞希ちゃんが、ひどく傷ついたような表情を浮かべていたから。

「……そいつにもこういうこと、された？」

心臓が跳ねる。掠れた声と口調が、いつもの瑞希ちゃんとは少し違う気がする。

戸惑いに瞳を揺らすわたしを肯定と捉えたのだろうか。大きなため息をついた瑞希ちゃんが顔を近付けて、ちゅ……っ、首筋に吸い付いてきた。くすぐったさにびくと身体が揺れる。

「ひゃん……っ♡　くっつき、されてない、こんなこと……!」

「あら、そうなの？　それにしても可愛い声出すのね、伊織ちゃん」

両腕ともシーツに縫い付けられ、ちゅ♡　ちゅっ♡　と吸い付かれて身体が熱が上がつていく。

戸惑いと驚きでいっぱいなのに、あの日から何度となく思い出していた瑞希ちゃんの唇が直接肌に触れた途端、背筋に甘い震えが走った。

「ちっ、ちがうう、っんう♡　み、瑞希ちゃん、待ってよお……っ」

「待って？　待ったわよ、ずっとずっと待ってたわ、アタシ。何もかも無駄だったみたいだけど」

「っ？　ずっとって……あっ？　待って、だめ、恥ずかし……っ」

流れるような仕草で白いシャツのボタンを外されて、はだけた服の裾からお腹に手を差し入れられる。擦ったさに震えていたら、あっさりとシャツをめくられて——ブラジャーを、見られてしまった。

眉を寄せた瑞希ちゃんが、細く息を吐き出す。

小さく開いた唇が、ほんのわずかに震えていた。

「……ずっと、夢に見てた。伊織ちゃんのこういう姿を夢に見ながら——」

待ってたのに」

「え、う……うそ、っあ？♡ や、くすぐったいつ、みずき、ちゃん……っ♡」

覆い被さる瑞希ちゃんが、ちゅ……っ♡ と、胸元にキスをする。

撥ったさに背筋を反らしていたら背中に手を潜らせて、ぱちんとブラのホックを取られてしまった。

いろいろと受け止めきれないから一旦手を止めてほしい。せめて男の人についてはちゃんと話さなきゃって——そう思うのに。

（うう、ダメ♡ あちこちキスされる度、嬉しいって思っちゃうし……囁かれる度、触れられる度……こないだのこと思い出して、ちゃんと抵抗、できない……っ♡）

「やっぱり男の人、もう苦手じゃないみたいね。すっごく期待したエッチな顔してる……」

「っそれは、み、瑞希ちゃんだから……っひや、うう……っ♡」

緩んだブラの中に手が潜ってくる。膨らみを辿ってすりすり♡ と乳輪のまわりを撫でられて、それだけで甘い声が出てしまった。

見上げる瑞希ちゃんの顔は怒っているようにも見えるけれど、見たこともないくらい熱っぽく上気している。わたしを見て興奮してるんだと思うほどに、言い知れない高揚が背筋を駆け巡った。

「……ずいぶん煽るのが上手なのね。そんな言い方、どこで覚えたのかしら」  
♡ し、知らな——あうっ!?!♡ あっダメえ、はじくの、やあ……っ♡

ぴんっ♡ すりすり♡ こりこりこり……♡

乳輪を撫でられて期待したようにふるりと震えた先っぽの突起を弾かれてびくんっ♡ と腰が浮く。間髪入れずに指腹で撫でるように擦られて甘い疼きが全身に広がっていった。

（うう……責めるみたいなこと、言われてるのに、指やさしくてダメ……♡

ほんとに瑞希ちゃん、こういうことしたいって思ってくれてたの？　じゃあ、こないだも……勘違いじゃなくて、わたしのこと……あ♡　まって、つまむのだめ、頭ばちばちして♡　うまく、考えられなくなっちゃう……っ♡

「ふう♡　ふう♡　うぐぐ……♡　瑞希ちゃ、それ、だめえ……っ♡」

「お顔とろけさせちゃって……敏感なのね、伊織ちゃん。誰かに教え込まれたのかしら？」

「ぐぐちが、あんっ♡　ううっちがう、そんなの、されてない……っ、んうう……っ♡」

「ふうん、じゃあどうして、こんなに敏感なの……？」

すりすり♡　カリカリ♡　カリカリカリ……♡♡

爪先で優しく引っ掻かれて熱っぽい息が止められない。それなのに瑞希ちゃんの声が徐々に、先程のただ責める言い方とは違う、意地悪めいた甘い響きを滲ませてきていて、余計に興奮してしまった。

「っふあ♡　それは、だって……瑞希ちゃんの、手が、きもちよ、よくて…

…おうんっ!？♡♡」

「っホント……煽るの、上手いわね……!」

きゅ♡ こりこりっ♡ くにくにくに♡

ぐっと息を詰めた瑞希ちゃんに乳首の根本をつままれてしまつて濁った声が出た。そのまま覆い被さつてまた首筋を吸われて鼻にかかった息が漏れる。何度も強めに吸い付かれるうちに、もしかしてキスマークかも、と思ひ当たつて心臓がきゅん……♡ と戦慄いた。

「っあ、や、や……っ♡ 瑞希ちゃ……それ、っあ♡ へんに、なっひやう、んうう……♡」

「……これ？ アタシ今、伊織ちゃんの乳首ずーっとカリカリしてるだけだけど……これだけで、変になっちゃうの？」

「あ♡ あ♡ ううっ♡ なる、へんに、なっひやうからあつ……っあー……っ♡」

すりすりすり♡ カリカリカリ♡

ただ乳首の先っぱを優しく撫でられているだけなのに、どうしてこんなに気持ちよくなってしまうのだろう。触れられてもいないおまんこからじゅわあ……♡ と愛液が溢れた気配がして恥ずかしいのに、くい♡ くい♡ と、誘うみたいに腰を浮かせるのを止められない。

はしたなく腰を動かすわたしを見ていた瑞希ちゃんが、はあ、と興奮した息を漏らした。

「ねえ伊織ちゃん、そんなエッチな腰ヘコ、どこで覚えてきちゃったの？ もっと嫌がるかと思ってたのに……そんな媚び方されたら、止まれなくなっちゃうじゃない……」

「ちが……♡ こし、勝手に……っふあ？♡ あ、まって、そこは……っ、っ……♡」

嫉妬の滲む掠れた低い声にぞくぞくと背筋を震わせていたら、この間みたいにスカートを捲られて、するするとお腹の近くまでたくし上げられてしまった。

目が潤む。嫌がらなきゃ、もっと抵抗しなきゃって思うのに、震えるばかり

りで動けない。

わたしはほとんど無意識のまま——この間みたいにな、いじめてもらうことを、期待してしまっていた……♡

「すつご、濡れすぎて色変わっちゃってるわ……ああほら、ぷっくり勃起したクリも、丸わかり……」

「つうう♡ だめ、瑞希ちゃん……っ恥ずかしいから……っ見ないでえ、っひ♡ あ、あ……っ♡♡」

すりゅ♡ ぬちゅっ♡ ぬる……っ♡

ところろに濡れてしまったパンツのクロツチを柔らかく撫でさすられて、ダメって思うのに勝手に足が開いてしまう。勃起しているらしいクリトリスの周りを辿るような手つきがたまらない。

（ダメ♡ ダメこれ♡ クリのまわりすりすり撫でられるのやだっ♡ 乳首いっぱいナデナデされたせいで♡ それだけで腰のうずうず止まなくて♡ 自分から、触って触って♡ ってするみたいに、みつともなくガニ股に



足開いて……♡ く、クリちゃんばアピール、しちやうよお……♡)

「~~~~……はあ、もう、エロすぎ……!」

「ふあつ、あ、あー……っ♡ それ、あつ、それえ♡ きもひい、っああ  
おっっ♡♡」

ぬりゅ♡ ぬりゅ♡ にちにちにぢ……っ!♡♡

苛々したみたいな手つきでぬるついた布越しにクリトリスを擦られて、  
あまりの快感に足の指が開いた。眉根を寄せた瑞希ちゃんがフリー♡  
フリー♡ と荒い息をつくのもたまらなくて、もっともっとなって言うみた  
いに腰を浮かせて自分からおまんこをフリフリ♡ してしまう。

——それなのに、突然ぱつと手を離されてしまった。

「ふあ、あ……あえっ?♡ あつやだあ、瑞希ちゃん……っなんでえ……♡」  
「……そんな顔しなくてもやめたりしないわよ。ただ伊織ちゃんのこと、  
もーっと気持ちよくするだけ」  
「も、もっ……あっ!?♡ やつ、な、なに……っ」

くちよ……っ♡ という水音と共に濡れたパンツを脱がされて、足を抱えられてしまった。さっきまですぐ近くにあった瑞希ちゃんの顔が遠ざかって寂しくなる。

すん、と鼻を鳴らして身体を持ち上げたら、瑞希ちゃんの顔はわたしの内ももの間に移動していた。

「このまま沢山感じて……アタシのこと以外考えられなくなっ」

伏せたまま囁かれる言葉にぞわりと全身が戦慄いた瞬間。

れろお……っ♡ と、熱い舌先でクリトリスを舐め上げられてしまった……♡

「っあー……っ♡♡ ま、まっへ、っああ♡♡ くり、くりとけちやぐ、ううぐ……っ♡♡」

ちゅうう……♡ ぬろ♡ れろ♡ れろれろれろ♡♡

軽く吸われて剥き出しになったクリトリスを甘やかに舐め回されて頭がバカになったみたいだった。気持ちよすぎて訳が分からない。さっきまでぐつぐつと煮立っていた快感が一気に吹きこぼれたみたいだ。

「ん……♡ すっご、愛液溢れて止まんないわ……美味しい……♡」

「やあ♡♡ だめ、みずきちやつ、むり、むりッ、これだめになっちゃ、ああ……♡♡♡」

（あ♡♡ むり♡♡ むりこれ、おまんこのお肉ぐいって引っ張られて♡♡ とろとろの割れ目ぬろろ……って舐められて♡♡ バキバキに勃起しちゃったクリ、ちゅうちゅう吸われちゃうの、むり♡♡ こんなにすぐイきたくないのに♡♡ だめ、だめ、イク……♡♡）

「うううらめええッ♡♡ はなひてッ、瑞希ちやつ、はなひ……っああダメ、イク♡♡ イク、イ……っきゅ、ううう……♡♡♡」

びくうんっ♡♡ と身体が反って大きい波が来る。何度も身体が跳ねて、そ

の度に瑞希ちゃんのお口にクリトリスを押し付けてしまいながら突き抜けるような絶頂感を味わった——その時だった。

ぬろおろろ♡ と、いつている最中のクリを裏筋から舐めあげられてしまった♡

「あうんッ!?!♡ まッ、まつへ、ああっ♡ ぐめ、みじゆき、ちやあんど♡  
いつてる、いま、いつてるから、ああおーっ♡」

「ンー……? 知ってるわよ、伊織ちゃんのカリビツクビク震えてるもの。  
さ、このままあと何回イったら、アタシ以外考えられなくなるのかしらね……?  
…?」

恐ろしいことを囁かれてひくん♡ と腰が震える。少しでも遠ざからうとシーツの中でもかくけれど、太ももを抱え込まれているせいで下半身が動かない。

それどころかちゅうううう♡ と吸い付かれてしまつて視界に火花が散っていくばかりだ。

「はひっ♡ はへっ♡ あーっ♡♡ もっもお、なつてりゅ、なつでりゅからあ……♡ おまんこ、やめへえ……っ♡」  
「まだ一回イっただけでしょ？ それにおまんこには何にもしてないわよ、アタシはただ、伊織ちゃんのイってもバキバキなクリちんぽに、フェラしてるだけ……」

ちゅぽっ♡ ちゅぽ♡ ぬるぬるぬるっ♡♡

涙目のままお願いをするわたしを見て薄く笑った瑞希ちゃんが、意地悪く囁いて先っぽを吸う。イって敏感になつてゐるのに吸われるせいで、ほんとに神経を直接舐めしやぶられてるみたいだった。

（こんなのむり♡ 気持ちよすぎる♡ いじわるなこと囁かれる度、嬉しいのやめらんないっ♡ あ♡ あー……♡ それすき、瑞希ちゃんのあつたかいお口の中で包むみたいになつとりフェラしてもらうの、きもちい……っ♡）

「あーあー、ぼーっとしちやって……♡ 伊織ちゃんがこーんなドスケベマヅクリちゃんぽだったなんて、ちつとも知らなかったわ……」

「はひっ♡ はひ……っ♡ あうぐ……♡ ごめ、ごめ、なひや……♡♡」  
「謝ることないわよ？ こんな事ならもつと早くいじめてあげればよかった——って、思ってるだけだから」

独り言みたいに囁かれながらまた、おまんこのお肉をむにいっ♡ と割り開かれてしまった。すっかり天を向くように勃起してしまったクリトリスが空気に晒されてぴくぴく……っ♡ と震える。

そこから先の動きは、まるでスローモーションみたいに見えた。

瑞希ちゃんの形の良い唇から尖った舌先が出てきて、つん……っ♡ と先っぽ同士がキスをして。

言い知れない快感にぞわりと背筋が沸き立った瞬間——にちにちにちっっ♡♡ と、舌のつぶつぶで全体を押しつぶすみたいに捏ねられて、脳天に電撃が走った。

「おあ……っ！？♡♡ まっ……あ、あ、あゝゝっ♡♡ あいぐっ♡ また

イクっ♡ クリ♡ クリちゃんぽッ、イクううづ~~~~っ♡♡」

びくっ♡ びくびくびく……ぷしっ♡

ぷっしやああっ♡♡

あまりの衝撃にがくと身体が仰け反る。まるでブリッジするみたいな体勢のまま、わたしはまた、勢い良くイってしまった……♡

身体がおかしくなってしまうて、おしっこが出るみたいな感覚も止まらない。イってからしばらくの間、ぷしゅっ♡ ぴしゃっ♡ と、何か漏らしてしまっていた。

「ふ……っすごいわね、伊織ちゃん。お顔びしょびしょになっちゃったわ、アタシ……」

「はへ……♡ へう……♡ うう、ごめ……ごめんなさ、わたし……♡」

「あーんなエッチな宣言しながら潮吹きアクメしちゃって、ほんとに初めてなのかしらね……」

ぼんやりとする頭にいつもより低い声音が反響するみたいに響く。

わたしはもうすっかり力の入らない腕をどうにか持ち上げ、ぎゅっと瑞希ちゃんのシャツを握った。どうしてこんなに気持ちよくなってしまうのか——理由を伝えなきゃと思つて、震える口を開く。

「つふ、うう……♡ 瑞希ちゃ……っあの、あのね……わたし……っ♡」

「……ん、なあに、伊織ちゃん？」

「わ、わたし……は、はじめて、じゃない……く、くりちんぽ、されるの……初めて、じゃ——」

「——へえ？」

突如低い声が響いて、ひく、と喉が引きつった。

一気に冷たいオーラが辺りに立ち込める。

やばい、言い方間違えたかも——つて、そう思ったときには遅かった。すう、と目を細め、表情を消した瑞希ちゃんが、静かにわたしを見下ろしている。

「……へえ、そう。そうなの、初めてじゃないのね、そう——わかったわ。



じゃあ教えて、伊織ちゃん。ほかに初めてじゃないところは、どこ？」

御託も言い訳も許さないと聞いたげな、冷たく射抜く視線に――  
わたしはただ、捕らえられた獲物のように震えることしか、できなかった。